

白虎審問官と星天塔の強気鹿

全
10
話

R18

体
験
版

第1話

観測記録 八一二夜、月が二日早い

観測記録、八百十二夜目。天候晴れ、風なし。盛夏にしては空気の乾いた、上等な観測日和——のはずだった。

（……月が、二日早い）

交易都市ラウデンの北の高台、星天観測塔の最上階。巨大な黄銅の天体望遠鏡の接眼部から目を離し、宮廷天文官の鹿獣人セシルは観測簿に数字を書き付けた。頭上で小さな鹿の角と柔らかい鹿耳が、苛立たしげに揺れる。

中央神殿が頒布する公式天体暦によれば、望——満月は二日先だ。だが子午儀が示す月の高さも、欠け際の影の薄さも、暦の数字と噛み合わない。

そして何より。

（——私の身体が、今夜を「望の夜」だと言っている）

セシルには、宮廷の誰にも明かしていない体質がある。姿も声も骨格も、生まれてこの方すべて男。ただ股間にだけ、男の象徴の代わりに女の器と胎を宿して生まれた。獣人の古い言葉で「月の腹」、巷の言いで「胎持ち」。満月の前後三日、身体の奥に「月の熱」と呼ばれる発情の火が点り、完熟した果実めいた蜜の匂いが皮膚から滲み出す。

匂いを覆う消し香は、東岸診療所の処方で欠かしたことがない。丸葉を飲み香を焚く日取りは当然、公式の暦に合わせてある。暦が二日ずれているなら、処方の帳尻も二日ずれる。

（道理で、今夜は熱が強いわけだ……っ）

腰の奥で、火が膨らむ。太ももの内側を、つうと熱い滴が伝った。学者として断言できる。この熱は放置すれば朝まで続き、匂いは階下の衛士の巡回にまで届く。

セシルは螺旋階段の扉に門を——かけたつもりで、かけ忘れていた。熱に炙られた頭では、それにすら気づけなかった。

観測椅子に浅く腰掛け、帯を解く。処置は手順化してある。八年前からずっとそうしてきた。羞恥は非効率だ。効率だけが、秘密を守る。

「……ん、く……」

下着をずらすと、男の象徴のない平らな股間で、熱を持った蜜口がすでに濡れそぼっていた。細い指——中指の腹に古いインクの染みがある——で、充血して膨らんだクリトリスにそっと触れる。

「……っ、ふ……」

ぬる、と滑る。自分の指なのに、今夜は感度がまるで違う。二日分の帳尻を、身体が一晩で取り立てに来ている。

くち……くちゅ……。

静かな観測室に、密やかな水音と噛み殺した吐息だけが落ちる。目盛りを読むように呼吸を数え、機械的に指を動かす。あと数分で終わる。終わらせて、記録に戻って――

「――消灯の刻を、二時間は過ぎているぞ」

低い、静かな声がした。

セシルの全身が凍りついた。振り返った視界の先、開いた扉の前に、大きな男が立っていた。白い毛並みに漆黒の縞。青銀の瞳。背に神殿の紋を刺繍した漆黒のマントを羽織った――白虎獣人。

「な……っ、誰だ……!!」

「神聖審問官バイロン。明朝の予定で、異端古文書の査問に来た者だ。塔の灯りが見えたのでな」

蜜に濡れた指を晒したまま、セシルは動けなかった。逃げも隠れもできない。この密室の距離で、白虎の鼻が気づかないはずがない。第一法則。獣人の嗅覚に、胎持ちの秘密は隠し通せない。

「……ほう」

バイロンは扉を、外にではなく内に、静かに閉めた。匂いを廊下へ逃がさないための所作らしいと、一拍遅れて気づく。

「見ての通りの身体だ、審問官殿。……訴え出るなら好きにしろ。ただし査問は明朝の約定のはずだ。夜半の押し入りの非は、そちらにある」

震える声で、それでも顎を上げて言い返した。理屈は、セシルに残された最後の鎧だった。

バイロンは動かなかった。触れもしなかった。ただ青銀の瞳が、値踏みでも嘲りでもない、観測者の目でセシルを見ていた。

「訴える理由がない。俺の管轄は文書だ。……人の身体は、異端ではない」

「……っ」

「それより、途中でやめる方が長引くはずだ。熱とはそういうものだろう。……続ける。俺は星図を見ている」

言葉通り、バイロンは卓上の古星図へ視線を落とした。セシルは耳まで熱くなった。続けるのだと。人が見えている前で。冗談ではない——だが止めた熱は現に、行き場を失って腹の奥で暴れている。朝までこの熱を抱えて、巡回の鼻をやり過ごせるか。答えは否だ。

（……効率だ。これは、効率の問題だ……っ）

セシルは目を閉じ、指を再開した。

「ん……っ、く……あ……っ♡」

見られている。その意識だけで、感度が倍になった。指先で肉粒を転がすたび、腰が跳ね、抑えたはずの音が甘く濁る。水音が大きくなる。視線は星図に向いているはずなのに、白虎の耳がこちらを向いているのが分かる。

「や……っ、ん、ん——……っ♡♡」

びくん、と背がしなり、セシルは指の上で果てた。蜜口がひくつき、透明な滴が椅子を濡らす。絶頂の余韻で目を開けると、バイロンがマントを脱ぐところだった。

「……何のつもりだ」

「匂いは移る。白虎の匂いは、大抵の鼻を遠ざける」

肩にばさりと重い布がかけられた。漆黒のマントから、雪原みたいに乾いた、強い雄の匂いがした。腹の奥の火が、それだけで少し鎮まる。屈辱なのに、安堵している自分が心

底憎らしい。

「明朝、改めて来る。査問の対象は文書だけだ。——ひとつだけ聞いておく、天文官」
バイロンは戸口で立ち止まり、振り向いた。

「月は、いつが満ちだと思う」

「……今夜だ」暦を疑う言葉を、初めて口に出した。「公式暦は、二日間違えている」

「——俺の知る限り、その答えに辿り着いたのは、お前で二人目だ」

扉が閉まった。借り物のマントの中で、セシルは呆然と天井を見上げた。異端を裁くはずの男が、暦を疑う天文官を咎めもせず、去っていった。

（——二人目。なら、一人目は誰だ）

問いだけが、雪原の匂いの中に残された。

（第2話へ続く）

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。